

桃井富範

沼野教授 集中講義『境界を越える文学』レポート

今回の集中講義においては、ナボコフ、ソルジェニーツィン等を例とした亡命における言語の問題が取り扱われており、国家や言語という境界等を問題として、尚も存在・発展し続ける文学についてうかがうことができた。

境界を越える文学というテーマについては、私も以前から大きな関心を抱いていた。勿論、学問にはカテゴリーというものが存在し、例えば大学という枠組みの中でも文学部、法学部、教育学部、経済学部、医学部、工学部、農学部といったような分類が存在し、制度的に存続しているということは事実である。また、国家という制度にしても日本だけではなく、多々の国々が世界に存在し、ユーラシア諸世界についても、ソ連崩壊後、また沢山の国家地域が誕生した。また、言語の問題についても、英語などの国際共通語となっている言語の他にもロシア語や、フランス語、ドイツ語等の無数の言語が存在している。そして、人間の思考の方法は、その人間の母語と連関性を持つという教授の指摘は大いに的を得ているように思われる。内言と外言という心理学用語¹が存在するが、人間の内言は、恐らく自らの母語あるいは最も得意とする語学が用いられるであろうから、その内言の形式がその語学形式に準じるということはごく自然な事柄である。ゆえに、思考と言語という問題は切り離せないし、そういった状況の中で他者を肯定していくという行為そのものが、多言語的状況を肯定していくということに他ならないのであろう。

また、境界を越えるという文学という点では、私は修士論文においては非力ながらドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』に関する修士論文「ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』—ハイパーテキスト論考」を執筆したわけだが、その中においてはドストエフスキーと彼等の形成した思想である土壌主義との連関性について論じ、作品の舞台となった1860年代における農奴解放期の経済状況や資本主義などとも照らし合わせてみた。また、ドイツ神秘主義思想の概念である無底（Ungrund）がいかにロシアにおける無底（бездна）という概念として伝わったかということについて分析をいった。また、作品内における神概念の機能という章においては、バタイユらの思想や現代社会学理論、進化ゲーム理論などを用いた複合領域的な研究を行うことが出来た。これらの問題については更に深く研究を重ねていきたいが、新しい問題にも取り組む必要があるだろう。

といことで、今回ははなはだ未完成ながら、試論として、『ドストエフスキーにおける病い』という観点から研究を行ってみたい。この論点に関しては中村健之助氏による『永遠のドストエフスキー—病という才能』が存在する。

¹ 内言とは音声を伴わない自分自身のための内的言語であり、主として思考の道具としての機能を果たす。一方外言とは他人に向かって用いられる音声言語であり、主として伝達の道具としての役割を果たす。…内言では文章が著しく圧縮・省略されていて、その内容を第三者が理解できないことが多い。中島義明編、『心理学事典』、有斐閣、1999年、

この、氏の著書の中で興味深いのは、まず第一にドストエフスキーと薬物に関するコラムである²。著書によると、ドストエフスキーは「oppi banzoedi」という名の睡眠薬を飲用していたようで、この薬は一般的な睡眠薬ではあるが、阿片を使っているので催眠作用があるという。ドストエフスキーの文学作品に存在する幻覚的風景、清澄感や多幸感も薬物の影響が存在するのではないかという氏の意見は面白い。日本においても、昔の文士達はヒロポンを打ちながら小説を書いていたなどと、文学作品の中で紹介されることがあるが、ロシアの作家においても同様の事柄が起きていたのだ。

また、ドストエフスキー文学といえば、研究者達は例外なく「癲癇」を取り上げているわけだが、氏は更に加えてドストエフスキーの強烈な文学体験は、統合失調症の体験だと主張する³。ここまで来ると最早病気オンパレードの感も否めないが、このような問題を深く分析すると、恐らくは狂気という人類の本質的な命題に辿りつくことも出来ると言えよう。

このような問題については既に例えばフォーコーが『狂気の歴史』において分析を行い、デュルーズとガタリの『アンチ=オイディプス』等でも論ぜられている問題であるので、今更ともいえるテーマではあるが、だからといって避けて通れるわけでもなからう。ここでは狂気の問題について触れてみよう。

『狂気の歴史』においては、偉大なる現象としてある種ロマン主義的に描かれてすらいる狂気という問題が、いかにして精神の病気として狂人保護院ないしは精神病院に幽閉されるにいたるかという問題について歴史的に描かれている。やはり、この際に常に問題とされうるのが、医者と患者というある種の対立構造であり、医者が精神的に健康であって、患者が常に病んでいるという状態を保ち続けるためにも精神科医達は不断の努力を行い続けているのだろうか。現代文学理論においては、超越的所記⁴という用語が存在するが、この点に関して言うならばこと精神医学などというものは精神の健康を超越的所記としてその中心群に集まるテキスト群と権力構造と皮肉られても文句は言えまい。

ただ、この分裂病という問題にしてみても、ある種この問題は言語の問題に起源を発しているようにも思われる。というのも、言語という問題自体がある種の二項対立的構造を

² 中村健之助、『永遠のドストエフスキー』、中公新書、2004年、P156-158、

³ 中村健之助、『永遠のドストエフスキー』、中公新書、2004年、P141、

⁴ 超越的所記 *transcendental signified* (デリダ) —ある特別な言語体系のために中心を提供する記号。中心として、それは安定性、存在、そして単一の透明な意味を促進させるのだが、それというのもそれ自身の意味は、他の如何なる記号にも依存しないからである。

「神」「正義」「真理」といった記号は、このように機能する。こういった「超越する記号」がなければ、宗教、法律、哲学のような、論証に拠る体系の伝統に則した概念は、一貫性の欠如と中心となる用語が欠けているせいで崩壊してしまうだろう。デリダは、記号はそのような立場には決して至り得ない。何しろ、記号は全て他の記号との関係の中で意味をもつのであるから、と主張する。これを実証する作業が、西欧思想の伝統となってきた領域を彼が脱構築する大きな部分を占める。(グレアム・アレン著、森田孟訳、『文学・文化研究の新展開：間テキスト性』、研究社、2002年、P269)

持っている。例えば、善と悪、健康と病気というような風にであるが、人間は思考そのものを言語形式で行う以上、言語は二項対立、いわば分裂をその中にはらんでいるのであって、思考のみの世界に没頭してしまえば、分裂的にならざるをえないという問題は必然的な問題であろう。実はこの問題については過去に哲学者・作家達がそれはもう悲愴な努力を行っている。このことについてはすでにもう修士論文の中で述べているが、たとえばシェリングは言語構造の底に潜む二項対立を何とか解決しようとして無底 (Ungrund) という概念を作り出したわけだし、ドストエフスキーもソドムの理想とマドンナの理想の相克を解決するためにカラマゾフ КАРАМАЗОВЩИНА なる概念を生み出し、それを全人類に適応させようとしたのだっただろう。しかしながら、彼らの血の滲み出るような努力も他者にとってみればただのテーゼに過ぎず、そのテーゼに対するアンチテーゼ、アウフヘーベンがテーゼとなり、アンチテーゼ、アウフヘーベンの繰り返しが行われて、言語のバベルの塔が構築されるに過ぎず、そのバベルの塔を構築し言語ゲームを続けることで人間は狂人と言われることをかろうじて免れているに過ぎないかの様相である。

これらの閉鎖の悲劇に関して言うならばガルシンの『赤い花』をテーマとすると興味深かろうし、先ほど述べた医者と患者の健康と狂気の対話とその逆転という観点から見ると、当の医者でもあるチェーホフが『6号室』の中で、アイロニーとユーモアを織り交ぜて描いている。ドストエフスキーに関して言うと、『分身』等が典型的に取り扱われる。『白痴』の中では主人公であるムィシキンの設定そのものがアレである。では、『カラマゾフの兄弟』の中ではどうだろうか？

まず第一にクリクーシャの描写であるが、この描写がある種聖なる病気として描かれている点に注目したい。また、イワン＝カラマゾフが陥る狂気が存在するが、この点についても過剰な内言という点から鑑みると興味深いと思われる。また、ドミートリー＝カラマゾフが陥る狂気には、狩猟性から農耕性へと変化する人類そのものが直面せざるを得ない危機そのものが描かれているように思われる。ドミートリーの名前にはデーメーテルという農耕女神のイメージが刻み込まれており、彼は退役軍人として登場する。彼の物語は、まさにそれらの戦争などのカオス的な世界から農耕への回帰をテーマとした時に必然的に訪れざるを得ない精神的危機を描いているといつてよかろう。

この点に関しては、中井久夫氏の意見が参考となろう。彼は狩猟社会と農耕社会の成立における分裂的危機について指摘している。「狩猟採集民の時間が強烈に現在中心的・カイロスの的であるとすれば、農耕民とともに過去から未来へと時間が流れはじめ、クロノスの時間が成立した。農耕社会は計量し測定し配分し貯蔵する。特に貯蔵、このフロイト流に言えば「肛門的な」行為が農耕社会の成立に不可欠なことはいうまでもないが、貯蔵品は過去から未来へと流れるタイプの時間の具体化物である。その維持をはじめ、農耕の諸局面は恒久的な権力装置を前提とする。おそらく神をも必要とするだろう。…とにかく閼門は貯蔵と農耕の成立にある。…強迫的な農耕社会の成立とともに、人間は自然の一部から自然に対立する者となったとは複数の人々の指摘するところだが、私はそれと同時に分裂

病者が倫理的少数者となったと言いたい。この時からS親和者（分裂病親和者）は、社会に自らを押し付けようとするれば、「上」へ向かうより他はなくなったようだ。当然、多くの失調者が予想されよう。」⁵人間一人ひとりが体験するであろう精神的危機が、実は人類が歩んできた、そしてこれからも歩んでゆく道そのものであると理解するならば、問題を解くキーが与えられるのではないか。

ロシアや世界における精神医学について、より深い狂気の問題など大きな問題はあるが、このようなテーマも興味深いものの1つであろうし、努力を続け、具体的分析等を行い今後の課題としたい。

⁵ 中井久夫、『分裂病と人類』、東京大学出版会、2000年、PP20－26、